

論文概要

東京医療保健大学

医療情報学科

学籍番号 H09008

氏 名 遠藤 晋

非ステロイド性消炎鎮痛剤使用時の胃薬処方に関するデータ検討

どのような薬にも副作用の発生はあり、正しい用法・容量で使用していても副作用は発生してしまう。しかし、複数の薬を正しく組み合わせて使用すれば、副作用の発生を少なくすることができる場合がある。術後の患者や炎症が起きてしまった患者に非ステロイド性消炎鎮痛剤を投与すると、胃炎という副作用を引き起こしてしまうことがある。胃炎は胃壁の炎症で、その原因が取り除かれれば数日で軽快するが、重症化すれば手術が必要となることもある。そのような副作用の発生の減少に対して胃薬が投与される。本研究では、消炎鎮痛剤を使用した患者の胃薬投与に関する臨床データから、どのような胃薬を投与することが副作用の発生の減少に効果的であるかを検討する。

山梨県内の複数の整形外科医師によって集められた 1243 人の臨床データが本研究の分析対象となった。このデータを加工し、患者が使用している胃薬の種類や副作用の発生について様々な分析を実施した。まず、さまざまな因子が副作用の発生にどのような影響を与えており、およびそれらの因子が胃薬と関連しているかを調べるために、単変量の分析が各尺度に応じた検定を用いて行われた。さらに、これらの因子の影響を考慮して、胃薬の種類と副作用の発生との関係が多変量解析手法、生存時間分析手法を用いて分析された。

分析の結果、単変量で調べた時と多変量で調べた時、副作用の発生を目的変数とした分析時と発生までの時間を用いた生存時間分析を行った時とで結果が異なった。

本研究の多変量生存時間分析の結果では、ヒスタミン H₂受容体拮抗薬、プロスタグラジン製剤、胃粘膜保護剤の順に副作用の発生頻度は低かった。この結果から、非ステロイド性消炎鎮痛剤を投与し、副作用が発生を防ぐために投与する胃薬は、ヒスタミン H₂受容体拮抗薬が最も適していると考えられる。

目次

第一章 はじめに	P1
1.1 痛み	P2
1.2 非ステロイド性消炎鎮痛剤の副作用の原因 (非ステロイド性消炎鎮痛剤と胃薬の関係)	P3
1.3 胃薬の種類	P3
第二章 研究目的	P4
第三章 研究方法	P5
3.1 データについて	P5
3.2 調査項目	P5
3.3 分析手順	P6
3.4 生存時間分析 (比例ハザード分析)	P6
第四章 研究結果	P7
4.1 データの概要	P7
4.2 副作用の発現を目的変数とした場合	P8
4.3 生存時間分析	P9
第五章 考察	P11
5.1 データの概要	P11
5.2 副作用の発現を目的変数とした場合	P11
5.3 生存時間分析	P12
第六章 まとめ	P13
第七章 謝辞	P14
第八章 参考文献	P15